

## 地軸

松山市の北条地域が舞台のドラマ「花へんろ」で、中条静夫さん演じる照一は、脇役ながら深い印象を残す▲家業そっちのけで芸者遊びにのめり込むなど、周囲をあきれさせてばかり。それが違う表情を見せたのが、ビルマで戦死した息子の戦友が訪ねてくる場面。家族とともに最期の様子を聞いていたが、遺品の壊れた眼鏡を静かに掛け、涙とともに絞り出す。

「何にも、見えんじゃないか…」▲この一言のために、さんざん道化を演じ続けさせたのではと思わずにはいられない。

脚本を手掛けた早坂暁さんの実体験に基づくと、▲12月の早坂さん没後2年前に、エッセー集「この世の景色」(みずき書林)が刊行された。闘病記や原爆・戦争体験、故郷の北条地域への思いなどをつづった35編を収録している▲編さんした妻の富田由起子さんは「読んだ人にとって、何かの『答え』が見つかるような本になれば」と思いを語る。懸命に生きる者への慈しみや、それを不条理に奪われた者への悲しみに寄り添うまなごしは、「花へんろ」や「夢千代日記」といった代表作にも通底する▲原点は幼少期に出会った、病や苦悩を抱えて歩く巡礼者たちである。「紅く染った女遍路」という一編には、「お遍路さんは、路傍に生きる人たちの、あるいは身代わりとして歩いているのだろうか」とのくだけりがある。残されたドラマや文章は、その思いを昇華したものだと思ふかされる。

2019.10.16